

松山東雲女子大学 30 周年に寄せて

— 教育の基本としてのコミュニケーション —

For the 30th Anniversary of Matuyama Shinonome College
What cannot be avoided in education is interpersonal communication

児嶋 雅典

Masanori KOJIMA

(松山東雲女子大学元教授)

1, 岡本道雄先生との出会い

短期大学保育科で教員生活をしていた 1992 年松山東雲女子大学が新設された。初代学長は岡本道雄先生でした。当時、岡本先生はすでにさまざまな方面において重鎮であり、私には近寄りやすい存在でした。

ある日、その先生から研究室に電話があり、学長室に伺いました。岡本先生と私は教育哲学会の会員でした。その関係で連絡をいただいたのです。「あなたの原稿を拝見しましたよ」と言われました。それは、私の大学院時代の作品で、イギリスの教育哲学者シェフラー (I. Scheffler) の論稿を紹介したものでした⁽¹⁾。数百人という小さな学会の会員が同じキャンパス内にいると知りバックナンバーを探されたようでした。「翻訳ではあるけれど文章がいい日本語になっていますね」のようなことを言われました。この原稿は作文や論理的思考でも有名な千葉大学の宇佐美寛先生のご指導をいただきながら仕上げたものでした。宇佐美先生は、当時英米で盛んになっていた言語分析的な手法を用いた教育学研究者として大変よく知られていました。当時の教育哲学研究は宇佐美先生によると「横文字を日本語にただけの研究が多すぎる。何のメタ思考もないのは研究ではない」と言われていました。英語の翻訳そのものよりも、それを日本語にして表現する難しさを週に一度、半年ほど丁寧にご指導いただいていた。宇佐美先生のおかげで私は、自分の思いがかなりの精度で言語化されるうれしさを経験してきました。しかし、そのことでなかなか論文を書けなくなったこともあります。自分が使う言葉が無自覚に用いられないからです。

その論評の中で私は、シェフラーの論を引用しながら、日本の教育学研究への提案をしました。それは現実の教育実践や教育研究の中から具体的な問題を見つけることであり、その方法として概念分析を用い、その考え方の前提を明らかにすることです。この姿勢は東雲学園での教員時代はもちろん今日まで変わっていません。

2, 具体的な事例を用いた授業の構想

授業は教科書の内容を教えることで終わりではありません。どんな知識も現状の中で生かされなければならないし、また、学生には授業を通して現状を改善する視点を持てるようになってほしいと願っていました。私自身も分かりにくい話をする人は本人も内容を分かっていないのではないかと、分かってほしいと思えば事例を用いるなどもっと努力してほしいと思っていました。ですから授業を担当する側（教員）になって努力したことは、一般論や抽象論で授業を終えないために実践事例を用意することでした。さまざまな事例を多く用意するには東雲の桑原キャンパスでの実習や各種の勉強会、研究会は好都合でした。同時にそれは私自身が保育を理解することにもなりましたし、保育を含めた教育を根本から考えることのできる事例を多く得ることができたように思います。社会では一般的に保育を軽視する傾向がありますが、それは大きな誤りです。教育の基本が保育の中にあるのです。詳細は津守真先生の論稿を読めば明らかです⁽²⁾。

私の授業の内容は、当局が定めたシラバスを守りながらも事例を中心にした内容構成にしています。授業のテーマを決めるとその内容に沿った事例を準備します。なるべく学生にとって身近なものがベターです。自分に置き換えて具体的に考えられるからです。例えば、子ども観に関する内容であれば次のような事例を準備しました。

10月の運動会の参加賞で子どもたちに2～3人掛けのシートが配られた。数日後、隣のクラスはそのシートを用いて外の芝生で弁当を食べた。それを見た実習生が入ったクラスの子どもたちも「ぼくたちもあんなんしたいな」と言った。先生は「いいね、しょうか。じゃ、明日もってきてくれるかな」と伝えた。

さて、翌日のお昼、先生は「みんな、もってきてくれたかな？」と聞いた。すると2人が忘れていた。実習生は自分のことのようにどきどきしながら様子を見ていた。「忘れてので今日はしない」ことになるのを心配していたようだ。ところが先生は「誰か一緒に座ってくれる人いないかな？」と子どもたちに声をかけた。すると、数名の子どもたちが「いいよ、一緒にすわる」「ぼくもいいよ」と応えた。それで無事に楽しいお昼の弁当を終えた。

その日の反省会で先生は次のようにお話しされた。①私は子どもたちをあまり緊張させたくない。忘れ物を注意するよりは幼稚園に喜んできてくれるようにしたい。きつく言えば、忘れないかもしれない。でも忘れてもよいから気楽に園生活を楽しんでほしい。②誰かが忘れることによって友達関係が広がることもある。誰か一緒にすわってくれる？と声をかければ、喜んで手をあげてくれる。そうしたら「ありがとう」と言ってあげたい。そうすると忘れて子も一緒にすわってくれる子もうれしいと思う。③もし、延期したら何人かの子は「おまえのせいで、できなかった」と忘れて子を責めるかもしれない。いじめの芽になる可能性もある。④加えて、忘れて子は別の機会に誰かが忘れてたら、今度は自分が「ぼくが一緒にすわるよ」と言えるのではないかなど。

事例そのものは簡単な内容ですが、この事例から考える子ども観や教育観の内容は深いものがあります。保育者はもちろん教師にとっても重要なはずですが、これは、私が保育者養成に長くとどまった理由なのです。そうです、すべての教師は保育者なのです。

3. 学生とのコミュニケーション

私が子ども専攻において重視してきたことは学生とのコミュニケーションでした。保育が子どもとのコミュニケーションであるのと同じように保育者養成でもそうしたかったのです。毎日の大学生活の中で世間話を含めたコミュニケーションを実践しようと思ったのは、基本的に保育の考え方があったからです。一緒に話をしたり遊ぶのはもちろんですが、一緒に散歩に出たり、絵本を読んだり、歌ったり、ゲームをするのもコミュニケーションなのです。保育や教育には相手がいるのですから、相手の置かれている状況に配慮しながら近づき過ぎず離れ過ぎずしなければなりません。相手のペースを乱してはいけません。

それには場所が必要です。その一つとして実習助手の職員が常勤し、学生と教員がいつでも出入りできる部屋を用意したいと思いました。その要望に当時の棟方学長は快く同意され、陽当たりのよい部屋を提供してくださいました。共同研究室という名前になっていますが、自由にできる休憩室でもくつろぎの部屋でもよかったです。キャンディを置くなど学生が集れるようにいろいろ工夫もしました。座布団や座椅子を持ち込んだ学生もいました。そこで世間話はもちろん実習や学生会、行事の準備などを進めるのです。

そのことが学生の自主的な活動を促すであろうと思いましたし、また教員のいろいろな姿を知ることによって授業への参加の仕方も変わってくると考えたのです。実際、以前よりは講義を聞いてくれるようになりましたし、反応もあり授業を進めやすくなりました。授業をより効果的にするには授業の前に学生とのよい関係が必要だということです。非常勤の先生はその時だけしかかわられないのですが、常勤は毎日かわれるのです。その利点を最大限生かして授業の構想をしたかったのです。

振り返ってみると、岡本先生とのお話の中に私の子ども専攻での実践が準備されていたように思います。これから先も愛媛県にとって松山東雲女子大学は必要な大学です。かかわった教員の一人として応援し続けております。

註

- (1) 児嶋雅典 「教育哲学—いくつかの最近の業績—I. シェフラーによる論評の紹介」日本教育哲学会編『教育哲学研究第44号』1891
- (2) 津守真 津守先生は、「教師はもともと人間を育てる保育者である。現代、ことさらにこのように同義語を反復せねばならないのは、教師という役割にはまり込むと、保育者としての人間のかかわりを忘れるからであろう」と書いています。令和になってさらにいじめの問題が深刻になっているのもこの「保育者としての人間のかかわりを忘れた」結果であろうと思う。「教師像の再構築」(岩波講座8岩波書店 1998)